

放牧場産子で舎飼産子並の発育を確保する 育成時粗飼料給与技術

福島県畜産試験場 沼尻支場
平成15年度畜産試験場成績概要
分類コード 07-02-50404200

部門名 畜産－肉用牛－放牧、畜産ほ育・育成、畜産粗飼料
担当者 前田康之・小林 準

I 新技術の解説

1 要旨

黒毛和種において放牧場産子は育成時の発育が劣るとされているが、良質粗飼料を適切に給与することによって、舎飼育成産子並に発育させることができる（去勢300日齢時体重300kg）。0～4カ月齢まで放牧した子牛に、離乳後10カ月齢までオーチャード：ルーサン：イナワラを5:3:1の割合で細断・混合したものを不断給与することで粗飼料摂取量が増加し、目標体重を達成した。放牧せずに舎飼育成した対照区と比較しても、発育値は遜色ない結果であった。1頭当たり飼養管理コストについても、放牧場産子が125千円程度、舎飼育成産子が157千円程度と放牧場産子が低コストであった。

2 期待される効果

- (1) 混合粗飼料給与により放牧場産子の発育が改善され、市場評価向上が期待される。
- (2) 黒毛和種の放牧利用促進、繁殖農家の収益性改善と規模拡大が可能となる。
- (3) 粗飼料多給により、肥育素牛として望まれる反芻胃の発達した素牛の育成が可能となる。
- (4) 粗飼料を細断することで牛床への引き込みロスが低減される。

3 適用範囲

- (1) 中山間地に代表される、黒毛和種の親子放牧が可能な地域
- (2) 放牧を取り入れている黒毛和種繁殖農家および繁殖肥育一貫経営農家

4 普及上の留意点

- (1) 放牧中、子牛が1カ月齢になった頃から補助飼料として、濃厚飼料を体重の1.0%量給与する。
- (2) 生後4カ月齢時に離乳し、舎飼管理に移す。濃厚飼料は体重の1.8%を制限給与、混合粗飼料に用いる乾草は1番草などなるべく質の良いものを給与する。
- (3) 細断混合粗飼料はオーチャードグラス乾草、チモシー乾草を主体に、ルーサン等の嗜好性の高い乾草を混合し、できるだけ豊富に摂取させることが重要である。

II 具体的データ等

表1 300日齢時の発育値

		日齢DG (kg/day)	体重 (kg)	体高 (cm)	胸囲 (cm)	胸深 (cm)
試験区 (放牧場産子)	去勢	1.19	356.4	122.8	165.6	58.1
	雌	0.90	269.9	111.9	146.6	54.1
	雌	0.82	244.6	110.6	151.2	58.2
	雌	0.95	286.0	119.1	155.4	53.0
平均		0.96	289.2	116.1	154.7	55.8
対照区 (舎飼産子)	去勢	0.89	266.3	112.8	147.6	56.2
	去勢	0.82	292.0	115.0	154.0	57.0
	雌	0.93	278.5	112.1	154.0	55.3
	雌	0.81	256.0	112.0	149.0	55.0
平均		0.89	273.2	113.0	151.2	55.9

- ・試験区
0～4カ月齢：放牧
4～10カ月齢：舎飼
(細断混合粗飼料給与)
- ・対照区
0～10カ月齢：舎飼
(農家の慣行技術)

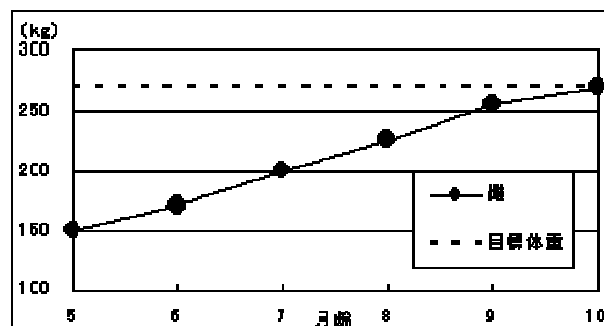


図1-1 放牧場産子(雌)の体重推移

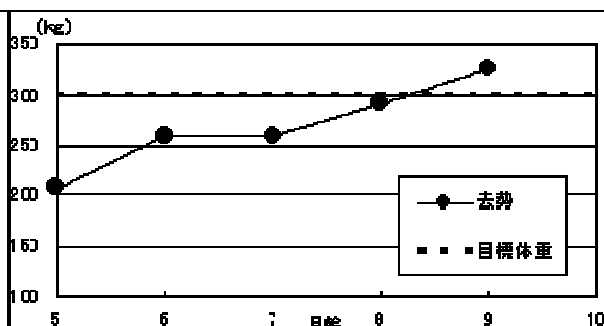


図1-2 放牧場産子(去勢)の体重推移

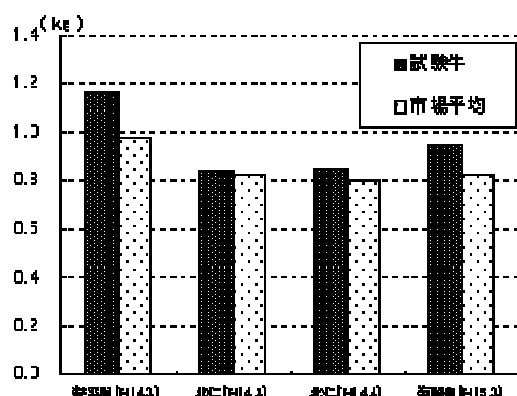


図2 試験区牛の出荷時日齢DG

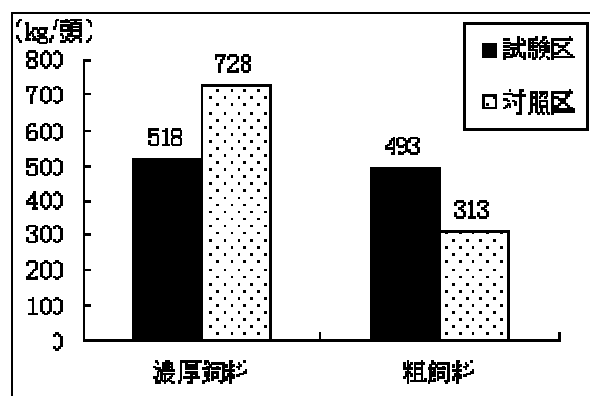


図3 4～10カ月齢の飼料摂取量

表2 放牧場産子の販売価格

血統・性(セリ日)	試験牛	同血統の 市場平均	市場平均に 対する割合
安平照・去勢(H14.3)	344,000	281,571	122%
北仁・雌(H14.3)	215,000	240,333	89%
北仁・雌(H14.4)	282,000	241,833	117%
菊照美・雌(H15.3)	426,000	287,000	148%
平均			119%

表3 1頭当たり飼養管理コスト

費 目	金 額 (円)	
	実証技術	慣行技術
濃厚飼料費	39,073	45,045
粗飼料費	15,413	28,873
資材費	2,931	5,862
労働費	67,209	77,599
合 計	124,626	157,379

- ・実証技術は0～4カ月齢で33%、4～10カ月齢で6%、トータルで約20%コストが低減される(農試経営部分析)

Ⅲ その他

1 執筆者

前田康之、依田浩文

2 主な参考文献・資料

放牧場産子を舎飼育成産子並に発育させる粗飼料の給与技術、東北畜産学会第52回大会講演要旨、P32(2002.8)